



No.143 2018. 9

発行 真言宗豊山派
北田山寶泉寺
所沢市北岩岡130
編集 色摩真了
ホームページアドレス
takaranoizumi.com

これからの寺院、これからの僧侶

高橋卓志師との出会い

ずうっと、お会いしたいと思っていた僧侶がいました。

名を高橋卓志さんといい、長野県松本市の神宮寺というお寺のご住職でした。「でした。」というのは、この5月に住職を辞められたからです。

高橋師は、昭和23年の生まれ。若いころは父親の元、僧侶としての役割を何となくこなし、気持ちのこもっていない形ばかりの葬儀やご法事を執り行っていました。

転機は供養のために連れていかれた、南方の島に眠る、日本兵の遺骨収集の旅でした。洞窟の中にごろごろと転がる人骨。響き渡る遺族の嗚咽。高橋師は、これまで真剣に人の「苦」に向き合ってこなかったことを痛感し、悔やみ、この時に真の発心を得たといいます。その後、師の寺院改革はすぐに始まりました。

はじめに、葬儀業者を通さず、遺体の搬送から火葬の手配まで自らが全て行い、費用を明確にし、また故人の生き様や希望に合致する葬儀の形態を作り上げる「**葬儀改革**」を行いました。また、寺院はNPO法人の元祖である。という理念のもと、閉館した旅館を買い取り、高齢者のためのケア施設を立ち上げたり、寺院は教育の場でもある



高橋師の講義の様子。スクリーンには「固定観念に揺さぶりをかける 既成概念を疑ってかかれ」の文字。

との考えから永六輔氏を校長に、「尋常浅間学校」を開設し、筑紫哲也氏や鎌田實氏らを講師に様々な学びの機会を設けたりしました。

それらの活動は自著『寺よ、変われ』にまとめられています。その挑戦的なタイトルに加え、本が出た当時は、仏教界に突如現れた異端児としてメディアに頻繁に取り上げられたこともあり、高橋師は同じ宗教者からも賛否両論ある存在となりました。実のところ私も、会ってみたいとは思いながらも、どこか冷めた目で見えていたりもしたのです。

今年の3月、有志と企画する年に一度の勉強会の講師に、高橋師の名前が挙がりました。「私たちみたいな若輩の依頼なんて受けるわけないよ。」という意見が多勢を占めるなか、若人の意を酌んでくれたのか、高橋師はわざわざ人間ドックの日程を変えてまで、当時お住まいだった京都から東京へお越しくださいました。

そして6月26日、表題のテーマで師の講演会が実現しました（当日はNHKの取材も。12月に師のドキュメンタリー番組が放送される予定です）。いきなりスクリーンに映し出されたのは「**固定観念に揺さぶりをかけろ。既成概念を疑ってかかれ**」の文字。続いて、これまで取り組まれてきた様々な挑戦を詳細に述べられ、神宮寺の住職を辞めて**齢70歳にして単独でタイへの留学を決意したことを**語っていただきました。

最後に日本の若手僧侶に向けたアドバイスをお願いすると「そんなの自分で考えなさいよ」とつれない返事が。そんな言葉とは裏腹に講演会後の懇親会の席でも師は最後まで残り、熱心に私たちと交流をもってくれたのでした。

活動内容には現在も賛否ありながら（私自身、賛同できないものもあります。）これほどの熱意と、自らを信じきる信念をお持ちの方とお会いできたことは本当に素晴らしい経験となりました。

現在、日本の仏教界は明らかな過渡期に来ています。お寺や僧侶が今後どのようにして社会と結びついていくか、一人一人の僧侶が真剣に考えなければならないことを否が応でも考えさせられる高橋師との出会いでした。

(真了)



高橋師と記念撮影

るりの会（お泊り会）

一年で最も疲れる行事、るりの会（お泊り会）が今年も無事終了しました^^ 寶泉寺のある地区には50名ほどの小学生がいますが、今年の参加は半分の25名。もう少し来てくれても良いかなあと思ったり思わなかったり…。



仏さまの本棚

その④ 『だいぶつさまのうんどうかい』

間もなく運動会シーズンがやってきます。こんな時期にお薦めしたいのがこちら。

『だいぶつさまのうんどうかい』（文：荻田澄子 絵：中川学 アリス館 2017年）です。お地蔵さんに千手観音さん、七福神や狛犬たちがそれぞれの特技を活かして、玉入れ、饅頭食い競争などで大活躍！その中で失敗ばかり、「もう、お寺に帰りたい」と独り言ちる大仏さま…。でも、最後には？

世界には色々な個性が必要なことを教えてくれるそんな一冊です。絵も最高にキュート！！



老僧のつぶやき ⑦

今の世相を現す言葉として「今だけ、金だけ、自分だけ」、こんな言葉があちこちで使われています。個人だけでなく企業や団体、国などにも当てはめても通じる言葉ではないかと思っています。核家族化や個人主義が思わぬ方向に進んでしまっていることもあるようで、いい文化が途絶え、また各家庭のしきたりや習慣が受け継がれない問題もあります。高齢者は「若い者には世話にならない」といえば若い者は「俺たちは俺たちだ」と、こうなれば家庭は分断され問題は複雑で、社会制度にまで及んできます。

ところでお檀家とお寺の関係は 10 年、20 年の期間ではなく、100 年、200 年の長さで続いていきます。その関係は各種の法文はもちろん伝統や習慣、さらにその時々に住職の思いなどによって成りたっています。小僧(しょうそう)は寶泉寺のことは是非家族で共有していただきたいという希望を持っています。家庭で話題にさせていただき、この「るり光」も「お寺から来てるよ」と家族で目を通していただくとありがたいといつも思っています。

捜しています！

犬でも猫でもありません。実は**大般若經典第 527 卷**を捜しているのです。去る 5 月 26 日、大般若転読会の日、後片付けの時に判明。一卷だけがなくなるとは考えてもいなかったことで、さてどうしたものかと思案中です。お心当たりの方は是非寶泉寺までお知らせ下さい。

編集後記

- ・るり光、143 号お届け。欠けることなく年 4 回、36 年経ったことになる。寶泉寺住職二代分の歴史はこれを見ればわかるようにと考えてきた。それと休刊しないことと、手に取ったらすぐその場で一気に読み切れるボリュームを意識してきた。読んでいただきたい望みと、反面読んでいただける内容かと反問しながら現在まで来た。
- ・経験したことのない酷暑、40℃超えを記録した夏だった。あわせて線上海雨帯による大雨、台風 21 号の風雨被害、北

海道では大地震と災害列島との表現も顔けてしまう。そういえば今年の冬の低温も当地では記録的で給湯器が初めて凍った。異常気象はもう異常ではなくこれが常態なのかもしれない。

- ・こんな折、北海道地震の被災者支援額、第一弾があまりにも低額だった。これから積み上がるだろうと想像はするが復興へのエネルギーが萎えてしまう金額だ。今政治が騒がしいが、税金は国民ファーストで使ってほしいものだ。

Sep. 13. 2018(琴)